

国木田独歩、運命の場所

——九鬼周造による『運命論者』論——

荒木優太

一、九鬼周造と『運命論者』

「国木田独歩の『運命論者』といふ小説も気味のわるい様な偶然を取扱つてゐる。つれあひが二三年前に亡くなつて女主人と一人娘の家があつた。其女主人といふのは二十五年前以前に或人の妻として男の子を産んだ。さうして其夫が病気で苦しんでゐる時に夫と乳飲子とをすてて他の男に駆落して了つた。捨てられた夫は非常に恨んでそのまま病気で死んだ。二度目のつれ合いが死んで一人になつてからは前の夫が幽霊に出て来る。今度娘に養子を迎へたが偶然にも前の捨てた夫と自分との子であることが判つた。それでその女主人即ち母なる人は息子に幽霊が乗り移つたのだと考へる。其男から云へば養母が生之母で、妻が父親の違つた妹であつた。この偶然のために皆三人とも非常に苦しむ。さうしてその男がかういう自分の身の上ばなしを鎌倉の海岸で他の男にするのであるがそれも全く偶然のことである。其男は自分の苦悶をはらすために酒を飲みたいのだが家で飲むわけにゆかぬので東京からブランデーを買つて来てその瓶を海岸の砂山の或場所にうめて置いて時々そこへ行つては掘り出して飲んでゐた。丁度其場所を占めてゐたといふ偶然が縁になつて二人が話をする。さうしてかうやつて話をするのも不思議な縁だと云つて居る。この小説にも二重の偶然がある。男の身の上が全くの偶然に支配されてゐる。さうしてさういふ偶然的な身の上ばなしを偶然なことが縁となつて今迄見知らない人に物語る」（『講義 偶然性』第一部）

国木田独歩の短編小説『運命論者』は明治三六年三月、『山比子』にて発表された。ここに長々と引用したのは哲学者、九鬼周造の講義ノート（昭和五年）に記されていた『運命論者』評だ。一見、ここには単に短編小説一篇の梗概が淡々と要約されているように見える。が、しかし、九鬼周造という日本の哲学者が如何なる業績を残した学者であつたのかを知っている者にとっては、この淡白な文章は九鬼特有の関心テーマに焦点化されて書かれていることに気づくだろう。そしてそれは、『運命論者』論としては勿論のこと、国木田独歩論としても未だ手つかずの新しい視座を提供しており、本論が以下論じようとする『運命論者』論の本質的なテーマを示唆的に先取りしているといえるのだ。即ち、偶然性のテーマがそれに相当する。

日本独自の美意識を論じた一書、『「いき」の構造』（岩波書店、昭五・一一）で著名な九鬼周造は、しかしそれ以上に偶然性の思想（史）を整理し、専門的に考究しようとした哲学者でもあつた。八年に渡る長期ヨーロッパ留学の帰国後、昭和四年以降、九鬼は自身の課題を偶然性に定め、「偶然性」と題する講演や講義、そして博士論文に取りかかった。九鬼の問題意識は明確で、九鬼からみれば西洋思想には「無」即ち「非存在」に対する知見が乏しい。それは神を絶対的な「有」や「存在」として認め、そこにあらゆる存在にとって本質的な「必然性」を見る傾向があつたからだ。だからこそ、必然性の否定の様態である偶然性を検討することで、狭義の西洋思想に閉じ込められない視角からの考察を試みた。九鬼の仕事はそのように評価できる。

「講義 偶然性」において、九鬼は里見の短編小説『不幸な偶然』と共に独歩『運命論者』に言及している。両テキストに対する言及は、これよりも更に後年の講義ノート「文学概論」でも再度登場する。そもそも、『運命論者』に限っていえば、九鬼の博士論文であり、主著の一つでもある『偶然性の問題』（岩波書店、昭一〇・一二）第三章にも登場しており、そこでは武者小路実篤の短編『運命と碁をする男』と共に、運命と偶然の関係を論じる際の例示として言及されている。このような頻出は、偶然性の思想を研究テーマに定めていた九鬼にとって、『運命論者』が象徴的な意味合いをもっていたことを暗示している。

では、九鬼にとって具体的にそれは如何なる意味をもっていたのか。何よりも先ず『運命論者』は「気味のわるい様な偶然」を扱った小説だ。その「気味のわる」さはどこに由来するのか。その主要の要素の一つは「養母が生之母で、妻が父親の違つた妹」という定めを受けたとする登場人物、高橋信造の出自をめぐる偶然性に求められる。九鬼は、この「偶然性」が殆ど「運命」と同義に取り扱われている、と指摘してい

る。例えば九鬼は、高橋の己の半生語りのきっかけとなる「自分」との対話の一部、「僕は運命論者ではありません」（自分）、「それでは偶然論者ですか」（高橋）を引用して、ここでは「運命と偶然とが畢竟、同一のものであることが前提されている」と述べている（第三章第一二節）。研究史上で独歩の運命観の典型的表出と捉えられていたテキストに、それ自体は明示的に主題化してないものの、偶然性という言葉で「運命」の語の隣接に投げ込むことで新たな論点を開拓していたところに、九鬼の『運命論者』評の評価すべき点が認められる。拙文「国木田独歩、偶然性の場所」(<http://p.booklog.jp/book/41589>)では、偶然性概念による独歩文学の再検討を試みたが、偶然性の哲学者である九鬼の言及は、その試みの正統性を補強してくれる、貴重な先行研究とみなすことができる。

しかし、当然ながら、実際的には「同一」の意味をもっていても、偶然と運命という二つの語には全く異なる語感があることは改めて指摘しておかねばならない。というよりも、運命とは普通に考えれば一種の必然性（決定性）なのだから、常識的にはその二つの語は相反しているとさえいえる。それ故問うべきなのは、運命と偶然の語が同義的に扱われているとして、なぜそのような接続が可能になったのか、ということだ。言い換えれば、あらゆる偶然が（そして勿論あらゆる必然が）「運命」として捉えられるわけではなく、偶然の中でも特権的なものが運命と捉えられるのであってみれば、その特権性の条件とは何なのか、これを問い直すことだ。

実際、これは九鬼の重要な関心の対象で、『偶然性の問題』の後半部では偶然と必然が両立してしまうような「運命」概念を考察している。『運命論者』言及もその文脈の上でなされたものだ。最終的に九鬼は「偶然性と必然性とはいわば「コイン」の裏表のような関係」にあり、その「コイン」そのものを「運命」とみなすような形而上学的な認識に到達する（註一）。九鬼の『運命論者』への言及はさり気なく、彼固有の哲学にとって一見重要な意味をもっているようには見えないし、九鬼自身も実際のところは自分の運命論研究の過程で使い勝手のいい例示の一つとして用いたに過ぎないだろう。しかしながら、哲学者の示唆に従い『運命論者』に内在する偶然性のテーマを前景化してみれば、そこには何よりも九鬼自身の哲学に適合的な複数の関連するテーマやモチーフがテキストに散りばめられていることに気づく。そして、それは独歩文学を再検討するのに極めて有益な視座を提供する。一旦、九鬼の難解な哲学的議論からは距離をとり、独歩文学の文脈も踏まえて、その細部を以下読み込んでいこう。

二、独歩文学における「数学」の表象

九鬼は「偶然論者ですか」という反問を「皮肉」だとして、運命＝偶然の定式が小説を支配しているとみなしている。しかし運命の語感にある決定性と偶然の語感にある非決定性は何の説明もなしに同一視することはできない。ここでテキスト内で用いられている「数学者」のカテゴリーを挿入させるとその差異は更に判明に浮かび上がってくるように思える。つまり、高橋は反問の後、自身の「運命論者」に対峙する立場として「数学者」のカテゴリーを設け、対話相手である「自分」をそこに当てはめているのだ。

「要之、貴様にはこの宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明亮なので、貴様の頭はニ々が四で、一切が間に合うのです。貴様の宇宙は立体ではなく平面です。無窮無限といふ事実も貴様には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す当面の大なる事実ではなく、数の連続を以てインフイニター（無限）を式で示さうとする数学者のお仲間なのでせう」（第二章）

高橋によるこの「数学者」発言は、「自分」の「原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ます」という発言に應えるものだった。結果には必ずそれに見合う原因があり、その原因には更に逆行可能な原因が必ず存在する。その系列には「運命」のような神秘的要素は介在しえない。そのような因果律を高橋は「数の連続を以てインフイニター（無限）を式で示さうとする」と形容しているのだ。数学が象徴している因果関係の必然論、このような性格をわかりやすくするために、スピノザの哲学を想起してもいいかもしれない。スピノザは数学を明晰判明な思索方法とみなし、自身の主著『エチカ』を幾何学的方法で書いた。つまり、『エチカ』という書は最初に定義があり、次に公理が導き出され、そして個々の定理が証明されていくという書式で進んでいく。そして、その哲学が主張するのは、当の方法たる幾何学のように、世界は因果関係によって論理必然的に決定されているということだった。その思想によれば、偶然的なものとは人間の（本当は存在する筈の原因についての）無知に由来している。スピノザは高橋がいうような「数学者」の典型的なイメージたりえるだろう。

勿論、独歩はスピノザを読んでいない。しかし、スピノザに代表されるような前述の「数学者」イメージは、『運命論者』以前、独歩の掌編『無窮』（『萬朝報』明三二・九・二〇）に元々出現していたことは指摘されていい。气象台で働く気象予報士の友人に送った書簡体のこのテキストは、「御手紙面白く拝読せり」で始まり、「宇宙現実の問題」をめぐって先んじて送られた友人の書簡に応答する形で書かれている。そこで友人の書簡の一部が引用されるが、それは正に高橋のいう「数学者」の思想そのものだといっている。「此 Idea の数の Infinity といふことより来るものである、故に無窮無限といふことを説明するには勢ひ数の連続を説くを要す、君等如き数理の思想なきものはとても駄目だ、併し、試に次の式を見玉へ、解かるまい」（『無窮』）

おそらくはこの文章の後に数式が記されているのだろうが、それは引用されない。これに対し、やはり先行していた書簡で「神の存在を説明する為めテニソンの一節を引用」したりするような（文学者であることを節々で予感させる）「余」は、今度の手紙で、弟と葡萄狩りに行き、そこで葡萄を食べつつステッキの細工を始める弟の姿や、友達と偶然出会った弟が二人で歌を歌う情景に、「無窮」の詩情を感じるということを書き記す。「余」は「数の連続」に対抗し、「詩の想」を無限（Infinity）の把握方法として据える。数学と詩という対立図式が設定され、更には前者が相対化される。この手続きを『運命論者』は明らかに転用している。

或いは、『無窮』と『運命論者』に挟まれて発表されている『鎌倉夫人』（『太平洋』明三五・一〇～一一）でもこの対立図式が用いられていた。この小説もまた『無窮』と同じく書簡体であり、柏田勉という数学者が文学者である「自分」に対して、鎌倉で出会った珍事件を手紙で物語るという体裁をとっている。珍事件とはかつて自分の下を去っていった愛子が、新しい恋人である寛と共に散策しているその現場に、偶然居

合わせてしまったというものだ。筋の起伏に富むようなドラマチックな特徴があるわけではない。しかし、柏田からの私信を公開する際、「自分」は前置きとして、わざわざ「数学者」の性質に言及して、断りを入れている点はこのテキストを読む上で見逃せない。曰く、「柏田が文学者でもなく小説家でもなく、純粹の数学者であるだけ、書くことが余り露骨で、艶も飾りもなく時に読者をして聳慄せしめは為ないかを恐れる許」。

しかしながらこのような断りに反して、柏田の手紙は決して「数学」的ではない。寧ろ、数学の無能を自ら告白しているかのような記述さえ見受けられる。つまり（何度相手が変わっても恋が同じように熱情的でありうるか、と自問しても）「其答を得やうとしたけれどもなかな数学のやうに式が立たない」と、数学が人性の把握に無能であると断言する。最終的には「君は小説家である。人間の研究者である。だから以上詳しく申上げて問ふ、鎌倉夫人は毒婦であらうか、ハイカラ毒婦だらうか。／僕は君等の所謂本能満足主義の勇者だと思ふ以て冥すべきだらう」と、文学者である「自分」に愛子の評価を明け渡しつつ、文学者の言葉（「本能満足主義」は高山樗牛の言葉）を借りて結論づけようとする。小説家が「人間の研究者」であるという前提の裏には、数学者の無能が、少なくとも数学者は「人間の研究者」ではないという判断が存在している。彼は自身の専門領域の敗北を告白しているに等しい。勿論、これは『無窮』で示されていた数学と詩の対立図式の転用であり、繰り返すが、直後の『運命論者』にも用いられる独歩に傾向的な図式なのだ。

画を描くことと並んで数学が得意だった少年が主人公の『画の悲み』（『青年界』明三五・八）や「数の観念」を喪失し、数を数えることのできない白痴少年が主人公の『春の鳥』（『女学世界』明三七・三）など、元々、独歩のテキストには数学に因んだ登場人物が数多く登場してくる。これは伝記的に説明すれば、勿論、小説家になる以前、（研究者によって佐伯時代と呼ばれる）英語と数学の教師をしていた大分県は佐伯での経験に由来しているといえる（註二）。独歩はどのような数学の授業をしていたのか、そして当時、数学という科目にどんな感慨を抱いていたのかは分からない。だが、『無窮』から『運命論者』に流れている対立図式の系譜を参照すれば、独歩は少なくとも文学テキストの上では、一貫して数学を仮想敵として扱っていることは確認できる。

三、二つの必然論と二重の偶然性

遠回りをした、『運命論者』に戻ろう。このテキストは「運命論者」の対立カテゴリーとして「数学者」を設定している。関肇はその背景に同時代の近代科学思想（日本自然主義を形成していくゾライズムの流行など）があったと指摘しているが（註三）、独歩のテキストに対「数学」的な傾向があったことはもう繰り返さない。運命論は文学的（ないしは詩的）な項の系譜に連なり、数学と対立的な関係を結んでいる。しかし、このテキストにおいて特別に考えねばならないのは、或る意味でその対立性が果して本質的か否か疑問である、ということだ。というのも、運命論者も数学者も、テキストに従えばどちらも、実は決定論者に他ならないからだ。既に「数学者」をスピノザのイメージに託したが、正にスピノザは偶然性を認めない決定論者であった。すべては因果律によって決定され、偶然と見えるものは、単に人間の無知に由来している。そして、「運命論者」もまた運命が世界の事象を決定するという点で決定論に他ならない。つまり、『運命論者』というテキストは二種の決定論が相克する舞台でもあるのだ。

『運命論者』では数学的必然論と運命論的必然論とが相克している。では、この二つは何によって区別されるのか。ここにおいて、正に、九鬼が指摘していた偶然性の問題が浮上している。数学的必然論は偶然性を認めない。スピノザよろしく、それは事象を観察する当人の無知に由来している。本文の言葉を借りれば「自然界は原因結果の理法以外には働かない」とみなす。しかし、運命論的必然論は「理法」が生むその結果に符合的なある偶然的一致を見出し、その背後に超自然的な力に等しい運命を読み取ってしまう。「人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が沢山ある」。言ってみれば、数学的必然論は事象を成り行きを原因結果の連鎖によって事後的に必然性で説明しようとするが、その成行そのものが予め事前に決定づけられていたとは主張しない。そこでは単に個々の偶然性が因果の必然的体系に回収されていくだけだ。しかし、運命論的必然論は個々の偶然性（と見えるもの）が必然的体系に回収されるだけに留まらず、体系内の直接隣接しない偶然性（と見えるもの）同士の符合を根拠に、因果関係以上の意味を要求する。その象徴化が「神秘らしい名目」と「自分」によって呼称された「運命」である。

高橋の場合、（運命を構成する前提の）直接的に隣接しない偶然性同士の符合は、一つには自分の出生には実は（思いがけず）秘密があったという出来事であり、もう一つには自分の愛する妻が実は（再び思いがけず）実の妹であったという出来事によって、生じている。それぞれの出来事を単独で取り出せば、因果の必然的体系に十分対処できる。しかし、その呼応関係は単に因果関係のなせる業なのか。この問いが運命を準備するのだ。

運命論的必然論は、数学的必然論よりも更に複雑な問いに取り組んでいる。個々の偶然性は因果関係で対処できる。しかし、過剰な意味を担ってしまう偶然性同士の符合にとって、数学的必然論は不満足な説明しか与えない。こうして呼び起こされる「運命」は、だから決して因果関係を否定しようとはしない。いってみれば、因果関係全体の配置そのものの必然性（意味）を問おうとするのだ。

図らずも、九鬼は「二重の偶然」という言葉を、運命論者と数学者の遭遇に用いていた。正に運命論的必然論は、「二重の偶然」性に、言い換えれば、一度数学的必然論で因果関係に追い払ったはずの偶然性が、潜在的に他のそれと協力して一気に反撃してくる、偶然性の回帰によって生み出される。高橋は自身の半生を物語ろうとする際、きっかけとなった遭遇を「僕と貴様と斯やつて話をするのも何かの運命です、怪い運命ですから、不思議な縁ですから一つ僕の秘密の杯を受けて下さいませんか」（第一章）と、「運命」の延長線上で、つまりは、出生の偶然性と恋愛の偶然性の奇妙な符合の延長線上で捉えている。これは客観的にみれば明らかに「運命」の過剰適用だ。しかし、運命論的必然論によって因果関係全体の配置に意味を求めようとする者は、その体系内では、運命と無関係な出来事を認めることができない。それ故、「自滅」道

具のブランデーの隠し場所と「自分」の読書の場所が一致するという瑣末で緩やかな符合でも、敏感に「運命」は再活性化してしまう。

九鬼は「二重の偶然」を運命の物語のきっかけとなる遭遇にのみ読み取っているが、しかし厳密にいえば、出生の偶然性と恋愛の偶然性の奇妙な呼応ないしは符合が運命を形成するのだから、「二重の偶然」は物語のきっかけという以上に、物語の本質、即ち運命の本質といって差し支えない。そして、ここによく示されているように、運命論的必然論にとって偶然性の重なり合いは、「二重」に留まらず多重化してしまう傾向をもつだろう。符合関係が、一対一から、一対多へと漸進的に広がり、最終的にすべてが運命によって決定される、と結論づけられる。運命論者は孤独な偶然性を認めることができない。

四、「其後自分は此男に遇ないのである」

以上のことから明らかなのは運命論者は、偶然性の（偶然的）重なり合いを発見するというよりも、実際には過去と現在の偶然性同士を無意識的に重ね合わせてしまっている、ということだ。そこには恣意性がある。こうして、偶然性は孤独を克服し、ネットワークを形成する。しかしネットワーク化した偶然性の系は、偶然というより決定論的な「運命」の内実に他ならない。

しかし、ここで九鬼が強調していた「自分」と高橋の「二重の偶然」に踏み留まってみることができる。ここでの「二重」性は当然、高橋にとってだけに有効で、その背後には「運命」の効果があった。それに対し、「自分」にとってこの同じ出来事は単なる偶然性、別の言い方をすれば、孤独な偶然性に相当している。「自分」が高橋との遭遇を偶然的だと感じているだろうことは細部の描写によって確認できる。つまり、テキストの舞台設定は「秋の中過」で「淋れ」た避暑地鎌倉であり、「都人士らしい者の姿を見るのは稀」で、にも関わらず彼は「衣装といひ品といひ、一見して別荘に来て居る人か、それとも旅宿を取つて滞留して居る紳士と知れた」男が凄味を帯びた眼差しを投げかけてくる場面に出くわしてしまうからだ。「自分」にとって偶然は少なくともテキストの中では、単独的で、一回的な性質を維持している。

それはテキストの最後の一文「其後自分は此男に遇ないのである」という言葉からも伺える。「自分」にとって「二重の偶然」には決して再現性がなかった。遭遇が生じる、そして物語は一回だけ果たさる、それでお仕舞い。たとえ同じ出来事についてであっても、この「自分」の単独的偶然感、高橋による多重的偶然感とは決定的に違う意味をもっている。それは「運命」に寄与するというよりも、一種無意味に捨てておかれる偶然性であり、言い換えれば、必然化への反転を拒み続ける純粋な偶然性である。高橋と「自分」の対照性は、数学と運命のそれに留まらない。偶然性を重ね合わせ解釈する者と単純かつ純粋に受け止めるもの、この対照性に注意せねばならない。

独歩のテキストには、物語の語り手と聞き手とが一回的な遭遇を果たし、物語行為以後、二度と再会しないという話の形式を数多く採用している。実際、『運命論者』の一文によく似た最後のフレーズは、パラフレーズされて別のテキストでも延々繰り返されてきた。

短編小説『一火夫』（『小柴舟』明三五・四）は妻に逃げられた夫（利助）の噂話を聞いていた「余」が、或る年の汽船に乗ると、偶然、その船の火夫をしていた夫に出会う。船が時化で沈むと悟った彼は自分が企てた女房殺しを船客達に話し始めるが、時化は凧ぎ、無事目的地に到着する。しかし何処へ行ったのか、「余が船を去るまでついに彼れは見当らざりき」という事態になる。その後、その地の新聞に「難破船の齎せる珍事」という、その晩の出来事に類似した長編小説が後日談付きで載ったが、「皆な擬名を用ひあれば其実の果して其れなりしや否やを知らず」。夫（利助）がどうなったか「余」には分からない。

『少年の悲哀』（『小天地』明三五・八）では、「一人の男が話し出した」十二歳の頃の思い出が語られる。ある晩、下男に連れられて少年は朝鮮に流れていく一人の娼婦と出会う。下男が彼女の離れ離れになった弟と少年が似ていたという理由で二人を引き合わせると約束していたのだ。弟のことを語りながら涙する女、そんな「やる瀬のない悲哀」を覚えた一遭遇の後には、「何処の涯に漂泊してその果敢ない生涯を送つて居るやら、それとも既に此世を辞して寧ろ静肅なる死の国に赴いたことやら、僕は無論知らない」などと締めくくられる。

『運命論者』以降、発話ではなく書記による物語でもよければ、『悪魔』（『文芸界』明三六・五）も同様の系統に属しているといっている。君子と布浦武雄の仲の間に突如入ってきた都からの移住者の浅海謙輔に対し、武雄は最初敵愾心を抱くが、キリスト教のつながりをきっかけに謙輔の神秘的な部分に惹かれていく。が、謙輔は『悪魔』という内心の煩悶を綴った一冊の日記的随筆集を武雄に託し、たった五ヶ月でそ

の村を去ってしまう。そして、「謙輔は其後遂に一度も我山林に来ないのである。永遠に来ないだらう」と武雄は予感する。「謙輔は今も『悪魔』を筆にしつゝあるや如何に」、それは無論分からない。

以上のテキストでは物語を語る者と聞く者とが偶然的な遭遇を一回だけ果たし、テキストの最後では、その後決して再会することがなく、物語の持ち主は消息不明の存在となってしまった経緯が伝えられる。知りうるのは、知らないということだけだ。そして勿論、『運命論者』も同様の構造をもっている。後藤康二は『運命論者』の（ひいては独歩の中期のテキストの）語りの構造について、「物語の場の仮構」という特徴を指摘している（註四）。後藤が「物語の場の仮構」と呼んでいるものは、簡単にいえば物語に導入された対話的要素のことである。目の前に対話者のいる具体的な物語行為においては、語り手は聞き手の注意関心を常に意識し、強いて自己設定しなかったような他者の疑問を先取りの応答しながら、語りが進められていく。ここに後藤は一人称視点によって完結された物語に他者性を導入する特別な緊張状態、即ち「語りの場」の成立を認める。特別な運命物語は、特別な「語りの場」に於いて語られることによって、そのリアリティーが担保されるのだ。なるほど、確かに高橋は「自分」を巧みに対話者に仕立てながら（仮構しながら）、自己の「秘密」を物語化している。

しかし、「場」そのものの成立は偶然的であり、「仮構」の努力はその偶然的遭遇の後でなされるものだ。偶然的でなければ、「二重の偶然」は成立せず、ということは高橋の「運命」は再活性化されず、おろろくは物語行為はなされなかったであろう。「こうやって話をするのも何かの運命」でなければ、物語は語られなかった。関肇は「作品を締め括る末尾の後日談からは、信造との関わりがその場限りのものではなく、彼の「其後」を氣遣う「自分」に内在化されている」と指摘し、更に自滅のみを待って酒に溺れていた高橋が姿を消したことを理由に、「日常生活を離脱する方向」で高橋に「何らかの変化が生じた」のだと――『酒中日記』や『女難』での流浪や『日の出』での再生といった独歩文学の傾向性を注記しながら――推理している。しかし、テキストに記されているのは、単に「遇ない」ということだけで、高橋が姿を消したとは書かれていない。「自分」の方がその後、鎌倉とは別の地に赴いたかもしれず、高橋のその後の成行を確定するには材料不足であるように見える。寧ろ、強調すべきなのが、行方知らずになった一回的遭遇者、即ち「その場限り」の主人公に対し、「自分」が何故か「氣遣」を内心に秘めているというその事実自体だ。そしてこの特別な「氣遣」は、当然、先に紹介した一回的遭遇のテキスト群全般に認められるといい。

整理しよう。『運命論者』には同じ偶然的出来事を多重的に受け取る者と単独的に受け取る者とが登場する。実は最後の「氣遣」によって、数学者と運命論者の対立が変奏されることに気づかなければならない。偶然性が多重的に重ねられると、それは運命に実在感を与え、偶然が必然へと反転する。しかし、それとまったく同じ出来事でも、単独的に扱う別の者にとってみれば、再現性のない一回性の、純粹に孤立した偶然性として現れ、そして消えていく。後藤の指摘は正しい。確かに『運命論者』には他者の参加を組み込んだ「場」の形成がある。しかし、その他者性は単に（弁証法的に）物語に起伏を加えるために存在しているというよりも、より決定的な視点、運命を再び単なる偶然性へと解体しようとする視点の導入に役立っている。いわば偶然と必然のシーソーが作られているのだ。高橋はあらゆる偶然性の背後に「運命」を読む、が、そのような男の物語がそもそも表現されるには一回的な偶然の出会いを、何よりもなんの「縁」故もない「自分」自身が経なければならなかった。運命論者は「自分」との出会いを「運命」へと回収するが、「自分」から見れば「運命」にとって自身は何処までも余計者に過ぎない。しかし物語の場所に居合わせ、物語を引き出してしまった。彼の感慨はここへ向けられるのではないか。

五、他者論としての偶然論

九鬼周造は『偶然性の問題』の中で、稀にしか起きないこと、故なくしてあることといった偶然性のいくつかの種類を分類しながら、その困難な概念の本質を見極めようとする。その書の冒頭で示されているように、偶然性は何よりも「必然性の否定」であり、ひいては「否定を含んだ存在」、「無いことのできる存在」である。ここで重要なのが、偶然性が存在（有）と無という二極の間で成立するということ、言い換えれば、有と無の性質を分かちもつ曖昧な対象であるということだ。つまり、偶然性とは「有と無との接触面に介在する極限的存在」ということになる（「序説」）。存在と無との接触面、インターフェイスにこそ偶然性は宿る。偶然性 contingency とは、語源的には「共に一触れること con-tangere」であることを考えれば、接触面は偶然性の必須の条件である。しかし、その「極限的存在」は「接触面」にあるがために、一種の壊れやすさを帯びている。というよりも、壊れやすさこそが「極限」の由来であると考えべきだ。九鬼は主著第三章の最後で「極限」を「尖端」と言い換えている。

「偶然においては無が深く有を侵している。その限り偶然は脆き存在である。偶然は単に「この場所」にまた「この瞬間」に尖端的な虚弱な存在を繋ぐのみである。一切の偶然は崩壊と破滅の運命を本来的に自己のうちに蔵している」（『偶然性の問題』第三章）

極限とは、尖端のことでもある。なぜならば、そこにある限界から一步でも外に出てしまえば、自己（同一性）とは別のものが待っているからだ。それは勿論、接触面という場所でもある。内と外、自己と他者、その接触面は個性の限界を指し示す。要約すれば、存在と無の接触面に等しい、極限的＝先端的な対象こそが偶然性であり、その特別なバランスが、「脆」さや「虚弱」、要するに壊れやすさ、究極的にいえば「崩壊と破滅の運命」を抱え込むことになる。完全に存在するのであっても、完全に存在しないのであっても、偶然性は成立しない。それが偶然性の「本来的」「運命」なのだ。

別の言葉でいえば、偶然性とは必然的に他者の問題を孕んでいる、といってもいい。つまり、偶然論とは他者論のバリエーションの一つだとみなすことができる。勿論、ここでいう他者とは他の人間のことを指しているのではなく、自己（同一性）に対して違和的な対象や事象のことだ。実際、九鬼はその種類を問わず「偶然性の根源的意味は、一者としての必然性に対する他者の措定ということである」、「偶然性は一者と他者の二元性のあるところに初めて存するのである」と述べている（結論）。この「二元性」が極限＝尖端、そして「接触面」の換言であることはもう一々指摘しなくともよいだろう。壊れやすい二元性（その緊張的差異）が崩れてしまえば、限界は喪失され、接触状態は破棄される。九鬼がフランス留学中に自身の家庭教師として雇い、後に実存主義の代表的哲学者となったジャン＝ポール・サルトルが正に述べていたように「接触は融合ではない」のだ（註五）。そして、その二元性の核心を九鬼は「他者」との対峙に求めている。そしてそれが偶然性の条件、つまり偶然性の「運命」なのだ。

だからこそ、九鬼は運命概念は、広義と狭義の二種類があるのだと主張することになる。「普通の運命の概念にあっては、目的必然が目的偶然を制約すると考えられるのであるが、勝義の運命概念にあっては、その反対に目的偶然が目的必然を制約する」。目的必然／偶然とはある者が目指している目的にとってある出来事が想定外かどうかという意味である。『運命論者』の高橋の場合であれば、目的偶然（結婚生活）は目的必然（運命）によって制約（支配）されていた。この場合、目的必然は神の意志や神秘に等しい。しかし九鬼は、それは運命の真の意味ではないと主張する。つまり、目的偶然によって運命を支配すること、九鬼も引用しているヤスパースの言葉を借りれば「偶然が内的に同化されている」状態こそ運命だということになる。

要するに、九鬼は偶然性に対する態度によって、偶然性と運命との両立を模索しているのだ。偶然の内面

化とは、複数の偶然性を影で操る運命物語を外在的に表象するのではなく、単独の偶然性を一回限りのかけがなさにおいて認めることにある。ここにおいて偶然性と運命は切り離すことができない。そして、正にこの態度を習得していたのが遭遇の一回性に感慨を覚える「自分」ではなかったのか。狭義の運命を享受できるのは、運命という処理に任すことで、実は他者同士である偶然性、そして「自分」との遭遇を物語に順応（和解）させ、他者性を縮減してしまった運命論者ではなく、寧ろ、同じ遭遇を何時までも一回的な偶然性として評価しようとする「自分」の方にある。関が述べていた「氣遣」とは高橋の「其後」ではなく、「他者」同士が偶然「遇」ったということの運命的な壊れやすさだ。

接触、壊れやすさ、そして他者、これらによって初めて両立する運命と偶然性、つまりは出来事の一回性。九鬼の示唆を借りつつ、九鬼が評価した以上のことを『運命論者』から読み取ることができる。その観点からみれば、このテキストは、運命論者が偶然性と重ね合わせて生み出す「運命」とは別の運命概念を、高橋と「自分」との偶然の遭遇によって示唆している。高橋にとって「自分」という他者は、後藤の指摘通り、物語に対話性を導入し、己の「運命」を強化（延長）させる一つの仕掛けとして機能していた。しかし、「自分」にとって自身は高橋という他者と彼の一連の行為とは何の由「縁」もなく、実際「此男に遇ないのである」と、二人の出会いは（九鬼の言葉を借りれば）「単に「この場所」にまた「この瞬間」に尖端的な虚弱な存在を繋ぐのみ」だった。しかしながら、九鬼に従えば「この場所」「この瞬間」における他者との対峙、その壊れやすく儂い場所にこそ、偶然性概念の本質的な性格が、つまりは一回しか起こらないという「運命」が宿ることになる。

複数の偶然性を組織する運命概念から、一回しか起こらないということ自体の運命概念へ。末尾の一文には、偶然性を単独的に取り扱う者の、高橋とは異なる、他者との出会いのかけがえなさ、壊れやすさへの意識、その「運命」感を読み取ることができる。九鬼の知見を借りると、『運命論者』というテキストは、数学者と運命論者の対立を偶然性への態度の対立へ変奏しつつ、正に（高橋と「自分」との）状況の生起自体が運命論的決定論へのアンチ・テーゼを物語る、（登場人物の主張に対し小説設定自体が批評的であるという意味で）メタ構造的な形式をもっていると解釈することができる。そこでメタ化の効果をもたらしているのは、当然、高橋と「自分」という「他者」同士の解消しない「二元性」の「接触」であり、もう「遇ない」という一回性を強調する他者への感慨だ。

『偶然性の問題』とほぼ同時期の昭和一〇年、正に偶然に、新感覚派の小説家である中河与一は文壇で圧倒的な影響力をもっていた私小説とプロレタリア文学を批判するのに偶然文学論を提唱していた。唯物史観や窮屈なりアリズムは、虚構の入る余地のない予定調和的な必然論的小説であり、突拍子もない創造的な偶然が不足していると主張した中河は、その後、評論集『近代はもう終った』（雪華社、昭三七・四）でやはり『運命論者』に触れている。「一人は、運命といふ神秘的なものを人生に見つづけてゐる人間であり、もう一人は〔中略〕運命といふごときものを信じることはできない、といふ立場」と数学者と運命論者の対立関係を読み、そして前者のような「神秘」的立場の喪失が、「謙虚な感情」「寛大な気持」の喪失に繋がると指摘している。例えば、それによって「人を殺しても革命が成就すればいいのだ」という傲慢さが育つ。過去の偶然文学論文の引用も交えたこの文章にも、九鬼と同様に、偶然が運命に転化する観察眼が生きている。「革命」批判の言葉は、プロレタリア文学を批判していた偶然文学論の残滓だ。「偶然の中に生きてゐるといふことを人間は自覚する以上意志をもって、その偶然の中の運命を開拓しなければならぬのである」。しかし、中河には「二重の偶然」への注目はなく、運命と偶然性の結びつきは具体的には説明されない。

けれども、対して、九鬼の示唆を翻って考えてみれば、単なる「数学者」と目されていた「自分」のもつ、極めて九鬼哲学的な偶然性（運命）への態度が認められる。その点で、九鬼の『運命論者』評は潜在的な価値をもっていると評価できる。このように、『運命論者』は、九鬼が想像していた以上に（九鬼自身の研究にとって）本質的な偶然性の性格の連関を捉えていたと評価できるテキストであり、ここから巨視的に偶

然性の文学として独歩文学全体を再検討する視座を切り拓いてくれる。この試みの個々のテキストに対する具体的な分析は別稿に譲りたい。

(註一) 小浜善信『九鬼周造の哲学——漂泊の魂』第四章、昭和堂、平一八・二。

(註二) 東京専門学校（現在の早稲田大学）の英語政治科で学んだ独歩は、佐伯時代に数学をも教えなければならなかった。とりわけ、桑原伸一が『国木田独歩——山口時代の研究』第二章（笠間書院、昭四七・五）で指摘しているように、小学校時代の独歩は数学が苦手であったのだからなおさらだ。この苦手意識が遠因で、文学テキストにおける数学の表象がネガティブに評価される、と推理してもあながち間違っていないかもしれない。

(註三) 関肇「国木田独歩「運命論者」の世界——事実と運命の間」『研究年報』、学習院大学、平四。

(註四) 後藤康二「〈自分〉という語り手と物語——独歩「運命論者」の場合」『日本文学』昭六三・一。

(註五) サルトル『奇妙な戦争——戦中日記』海老原武＋岩崎晴己＋西永良成訳、人文書院、昭六〇・七。ただし、語尾の訳し方を少し変えている。原文は「Le contact n'est pas fusion」(*Les camps de la guerre* : 1983)。

※独歩テキストの引用は学習研究社版『定本 国木田独歩全集』を使用した。なお引用内の〔〕は引用者の注記であり、／は改行を示している。

(2013.06.01)

※ 2016年4月19日追記。中島礼子『国木田独歩の研究』（おうふう、2009、568頁）によれば、本論で言及した『一火夫』には代作の疑いがある。ほかに『関山越』『浪のあと』『雪冤の刃』にも疑いがかかっている。本多浩が疑義を提出し、川岸みち子が代作と結論づけた。本来ならば本論にも手を加えるべきだが、過去のテキストを無暗に改竄するべきではないと判断したため、ここに注記しておく。

国木田独歩、運命の場所——九鬼周造による『運命論者』論
<http://p.booklog.jp/book/72257>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/72257>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/72257>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ